

「新しい東北」官民連携推進協議会  
令和5年度 福島県意見交換会（第1回）議事概要

令和5年6月7日  
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】令和5年6月7日（水）13:00～15:00

【場 所】復興庁福島復興局

【出席者】（敬称略）

＜副代表団体＞（所属の五十音順）

株式会社 J ヴィレッジ／株式会社東邦銀行／福島県／国立大学法人福島大学／一般社団法人ふくしま連携復興センター

＜復興庁＞

復興庁 復興知見班／復興庁 福島復興局

＜事務局＞

株式会社 J T B 総合研究所／株式会社 JTB

【議事概要】

1 開会

1.1 復興庁の挨拶

- ・復興庁より、福島においては昨年度から着実に取組を進めてきているため、その取組がしっかりと実を結んでいくよう、引き続き忌憚のない意見を頂戴したい旨、挨拶した。

2 各団体の活動紹介

復興庁、福島県、福島大学より、取組紹介資料（資料 2-1～資料 4-3）を基に、取組を紹介した。

3 令和5年度取組方針、取組内容等について

（1）運営委員会について

運営委員会の構成員・当面の進め方については、事務局案に概ねの同意が得られた。また、運営委員会の構成員として地域おこし協力隊の方にも声をかけるべき、運営委員会に参加した昨年度の参加者は実際の話し合いの場の参加者として取り扱うといった運営委員会参加のインセンティブを考えるべきといった意見が得られた。

現時点で考えられる企画内容として、フィールドワーク、TFD 等を行った後、事務局側が用意したコースだけでなく参加者が望む場所や人を訪ねると良いといった意見が得られた。この際、話し合いの場が開始する前の事前インプットが必要という意見も得られた。

また、最終的な成果物については、昨年参加者の提案をベースとし、未来のふるさとの姿や全国にも発信できるような具体的なふるさと創生策を考えるような取り組みとしてはどうかといった意見が得られた。

（主な発言）

- ・事務局は研修、視察の受け入れを担当しているホスピタリティ事業部を主管とするが、J ヴィレッジも全社をあげて参画していこうと考えており、経営企画部も一緒にやっっていこうと思っている。経営企画部には企画部門と広報部門があり、ホームページの立ち上げ等も含めて、広報にもしっかりと取り組んでいきたいと思う。これから事務局としての役割がより具体的に詰まってくると思う

ので、しっかりと開催準備をしていきたい。

- ・各副代表団体より、今出席されている方でも若手でもいいので1名参加していただく。昨年度参加していただいた14名の若者には声掛けをしようと考えているが、社会人になった方もいるため、例えば後輩などを紹介していただいた場合には、受けるかどうか検討する。副代表団体の皆様から推薦のあった地域の事業者等にも参画いただく。ふくしま連復からは、檜葉町の地域おこし協力隊の入江さんと音楽活動を通じて交流を進める『そらとみく』の3名をご紹介いただいている。他にも副代表団体から推薦があれば、一度事務局で話をさせてもらって検討を進める形となる。9月の事前周知を考え、8月には企画内容全体の検討と決定を行う予定である。
- ・そのほかの地域の地域おこし協力隊の方にも声をかけていただき、希望があれば参加いただく形としてはどうか。
- ・運営委員会の参加に、インセンティブが必要ではないか。
- ・運営委員会に去年参加した学生が入った場合には、運営委員会という立場になっても、2月の話合いの場では運営側のスタッフではなく参加者サイドで、募集した人たちと一緒に事前体験等をしていただいてはどうか。そうすれば、運営委員会の中で、実践の場においてディスカッション以外に行う共通体験の部分で「こういう人の話を聞きたい」と積極的に自分たちの聞きたいところを挙げてもらおうといったことができるのかなと思う。
- ・運営委員会に入ったことによって、そこから先のプログラムを自分たちで考え、自らがインセンティブを作り出せる、ということ自体がインセンティブと理解した。
- ・実践の場の参加者という位置づけになり、最終的に2月の実践の場に参加する場合の費用が事務局負担となることもインセンティブの一つである。
- ・学生側の参加者をどこまで増やすのかは議論があると思う。まずは昨年度の参加者のみに声を掛ける形ではないか。
- ・地域おこし協力隊については、「地域おこしに繋がる」ということがインセンティブになるだろう。
- ・福島県外の学生でいろいろな活動で福島に関心がある学生にとっては、費用が掛からず福島に訪れることができ貢献できるということがインセンティブになる。逆に福大生にとっては近すぎて、沿岸部に1泊できてもあまりインセンティブにはならないかもしれない。
- ・大学の単位に結びつけることもやりようによってはできると思う。後期、災害復興学という授業を持っており、単位を取るためには最低1日、福島大学が主催するスタディツアーや自分で選んだ活動でもいいので、何らかの形で沿岸部に行きなさいという条件を付けており、そういう形で単位を付与することはできる。また、課題解決型の授業を増やしましょうというのが大学の最近のトレンドなので、そういう授業にして、「現地でのフィールドワーク何時間」みたいな形で単位にすることはできる。インセンティブという面では、本当はそうできるといい。
- ・昨年度の取組について、短い期間でプログラムができるのか不安に思ったが、ちゃんとできたので良かった。ただ、やはり1日目の視察がないと盛り上がらない。J ヴィレッジの中で朝から晩まで缶詰では、福島でなくてもできるということになってしまう。1日はフィールドワーク、エクスカッションがいる。2泊3日ならば、例えば1日目はこちらが指定したコースでフィールドワークをしてもらい、2日目の午前中などにプラスアルファで行きたいところ、尋ねたいところをオプションツアーにするなど、自分たちで選んで行ってもらう。あるいは企画を考えさせるのであれば、企画を考えた後、2日目の午後に追加取材できるような形にしてあげると、自分たちで選んだところに行って話を聞いて、それを実質的に企画に反映させるということができると思う。5月に福島大

学でやったプログラムは2日目の午前中をそういう形にして、我々が車を出して自由に行きたいところに行った。自分たちが選んだ場所、会いたい人に会って話を聞く追加取材はやはり良かった。

- 1回目の運営委員会では、細かい点よりは、最終的な成果物は何にするのか、そもそも何を検討する集まりなのかというところをきっちり決めた方がいいと思う。2回目ぐらいの運営委員会で、その目的に沿った運営にするならばこういうオプションやオペレーションが考えられるという議論の順番にするのがいいかもしれない。
- 何をランディングにするのかというところを共有しておかないと成果に繋がらない。TFD を行うことを前提にして、まずは結論・ランディングのポイントをしっかりと見極める。その上で、参加者には、新聞記事やオンラインでのレクチャー等を提供し事前プログラムを履修する形にしてはどうか。その上で、フィールドワークをすると思う。私たちは福島で何を求めていくのだろうかというストーリーを描く中で「この人とこの人に会いたい」というものを、観光交流課などの知を共有しながらプログラムを作ってもらおう。その上で距離的に難しいというようなアドバイスをする人を付ける。彼ら自身がプログラムを企画してストーリーを作っていく、その後TFD をやると、そこで言葉が紡ぎ出される。出て来た言葉を繋いで詩を作って、ふるさとの曲を作るようなプログラムも考えられるのではないかと思う。
- TFDについては、実践の場の冒頭でやってみるのがよいのではと思う。
- 1日目の夜にアイスブレイクを兼ねてTFD をやり、そこでふるさとに関する言葉を集め、作曲者に渡す、2日目は参加者が自分たちの企画で会いたい人のところに行くなどして、午後はディスカッションに当てるということも考えられる。ただ、決して最後に曲が出来上がることが成果物ではない。参加者も、参加者としてのアウトプットが3日目には出せるようなテーマやプログラムにしないといけない。
- 詩を紡ぐのはいいと思うので、自分たちの想いとして皆で言葉を紡いでいって、1つの言葉の群れを作っていこうという形にしてはどうか。そこからはお楽しみでレクリエーションに近い感じで、その言葉の群れから寸劇を作るとか、あるいは歌にするとか、トークでもいい。自分たちで作った言葉の群れを読んでどんなことを感じたのかを表現してもらってはどうか。
- 話し合いの場の成果としてどういうアウトプットを求めるのか、そこがまだイメージできない。前回は「企画を考える」ということでチーム間の競い合い的な要素もあって、かなり一生懸命取り組んでくれた。一生懸命取り組める目標設定があった方が参加者にとっても張り合いがあるし、我々としても生み出される成果として出しやすい。
- 少なくとも我々福島に住む者にとっては、12年前、東日本大震災と原発事故で「ふるさがなくなるかもしれない」というところがあった。そしてそれは今も続いている。「ふるさととは一体どういう場なのか」という議論をする際、福島のふるさとの話をするのだけれども、「福島の話だね」ではなく、自分に引き寄せて考えていけるようなものにしたい。
- 参加者の最終的なアウトプットについては、去年の参加者の若者が「こういうことをやりたい、やったらいいのではないか」と考えてくれたものをベースにすべき。Bグループの「目指したい、目指すべき未来の姿」として、今の我々の話を踏まえれば「未来のふるさとの姿を描いてほしい」ということでもいい。あるいは、Cグループのように競争的な意味合いをつけるのであれば、全国にも発信できるような具体的なふるさと創生策でもいい。1日目、2日目に今の福島の状態を見て、いまだに避難指示が解除されていないエリアがあること、そこにいつ戻れるか分からない中で暮らしている人の想いを知り、その中でふるさとに関するワークショップをした後にアウトプットを作ってみると、通り一遍の地方創生策とは違うものが出て来るのではないか。
- まず「福島にとってふるさととは何か」を学んでもらった上で、それを自分事として「それぞれのふるさとって何だろう」と考えてもらい、その上で「未来のふるさとの姿を思い描く」でもいい

し、政策やプランの立案でもいい。それに着地させるということで十分アウトプットになる。個々のワークにするかグループでやるかはまた詰めていけばいい。

- 例えば24間オープンする場所を1部屋だけ確保して、そこでは自由に話していい、夜に語ろうという人は集まっていい、という環境を作るという配慮をしてはどうか。
- 昨年のように立食形式で時間を決めて意見交換するのではなく、畳などで膝を突き合わせてじっくりと話すような形をとると話が深まるのではないか。
- J ヴィレッジには、最近やっと海外のチームが来るようになってきて、ようやく地域と海外の交流ができる段階になってきている。例えば他県から来る人とゲームで遊んで交流したり、先日は檜葉などで太鼓の団体に来ていただくなどをすると、全体の感想は把握しきれていないが、結構喜んでいただいていたと思う。ただ見学に来るだけでなく、1回滞在してもらってグループワークやワークショップをしたり、うちの職員が状況を説明させていただくだけでも何か感じることもあり、人との関わり方から感じることはあるのかなと思っている。

## (2) ふるさと TFD について

各会議参加者より、現在行っている研修や会議等において、ふるさと TFD の実施を積極的に検討していただける旨の発言が得られた。

(主な意見)

- J ヴィレッジの交流プログラムの中でふるさと TFD を実施することも検討できないことはないと思う。試合のインターバルの時間の活用や、会場として利用していただいている団体とのタイアップはできるかもしれない。
- 今年度も新入社員が入ってきているので、研修の中で「ふるさとについて」を取りあげることもできるのではと思う。
- TFD の手法については、新規採用研修や係長研修、管理職の研修などにおけるコンプライアンス関係の研修などに活かすことも考えられる。また、SDGs をいかに地域に広めていくか、地域づくりとSDGs をどう両立させるかといった議論を行う研修や勉強会にも応用できるのではと思った。
- 昨年度のグループAの議論では、トークフォークダンスで多世代の方と話し合うことで、ふるさとへの想いを若い世代が受け取るというようなことが議論されていた。

## (3) 事前体験の提供・参加者募集について

各会議参加者より、参加者募集や連携できる可能性のある取組や事業等が複数挙げられた。また、昨年度の実践の場では、学生とは違った視点を持つ社会人が果たした役割が大きかったことから、社会人へのアプローチ方法について模索していくべきといった意見が得られた。

(主な意見)

- 参加者の人数規模としては、昨年の参加者から提案いただいている規模が30名程度であるため、20～30名ぐらいかなと思う。
- 昨年、学生のみとするのか社会人を入れた方がいいのかという議論があり、結果的に社会人を入れた方がいいのではないかとということで社会人にも募集を行った。社会人がいたことにより具体性が上がった部分もあるため、学生以外の若者にもアプローチできる手段も模索できればと思っている。

- ・ 社会人が参加するデメリットとしては、学生に「非現実的だ」等のへこませるようなことを言ったりマウントを取ったりすることにあるため、エンパワーメントしてくれるような大人がいるといい。
- ・ 福島県が包括連携協定を結んでいる大学の学生や企業の若手に対する声掛けは可能かと思う。
- ・ 福島復興局が大学等で講義をする際に、参加者の学生に紹介するといったことはできるかと思う。

#### 4 閉会

7月の運営委員会の立ち上げに向けて、事務局において昨年度事業の参加者への声掛け等の作業を進めていくこととした。

第2回の協議会は8月28日の週をめどに開催することとし、最終的な日程については事務局より追って連絡、調整することとした。

以上